「作者・著者との時空を超えた対話」のために

― Reading with a pencil!!(読書は鉛筆を持ち、本に書き込みを !!)―

開倫塾
塾長　林明夫

Q：読書をするときには「作者・著者との時空を超えた対話」といわれますが、どのようにしたらよいのでしょうか。

A：(１)一番のおすすめは、「本を読むときには、鉛筆を持ち、どんどん書き込みをすること」です。

(２)私は、これぞという本を読むときには、年号や日付は欄外に書き写します。また、人名や地名、事件名などは横に線を引いたり、丸や四角で囲みます。

(３)著者の主張(いいたいこと)のところには「カギカッコ」をつけます。余白にポイントをまとめたり、感想や意見を書くこともあります。また、辞書で意味を調べたら余白に書き写します。

Q：余白にどんどん書き込んでいくのですね。

A：(１)その通りです。「余白(欄外)の書き込み」のことを、英語で「marginalia(マージナリア)」というそうです。

(２)「作者・著者との時空を超えた対話」のために、この「マージナリア」を大いに進めたく思います。作家の Austin Kleon 氏は、「Reading with a pencil.(鉛筆をにぎりしめながら本を読む)」ことをすすめています。ノートにメモを取るのではなく、アンダーラインを引いたり、丸で囲んだり、読んでいるときに感じたことを走り書きして空きスペースで論じたりすることで、読み手と書き手の中間地点を存分に楽しむことができるとのことです。

(３)日本でも、作家の阿刀田(あとうだ)高先生が「紙の本・新聞は人間をつくる」という講演の中で、「マージナリアと読書」を取り上げています。阿刀田先生は「読書で一番大切なのは、書き手と話し合って対話をすることです。つまり、本の著者が、なぜこのテーマに挑戦しようと思ったのか。そしてまず、どこから手をつけ、どんなところで困難にぶつかり、それをどう解決して、結局どのように辿り着いたのか…。」「自分が一番好きだと思える本を読みながら、少し著者と対話をしてみたらどうでしょうか。まさに読書の一番大事なことで、自分と意見が違う、ここは同じだ、なるほど、こんな風に考える人がいるのか…ということが見えてくるのです。」とおっしゃっておられます。

＊以上、公益財団法人文字・活字文化推進機構 活字の学びを考える懇談会 リレー講演 学校教育のデジタル化・子どもの未来講演録(2021 年 3 月 16 日)より引用。(12 ページ)

Ｑ：ところでこのような「作者・著者との対話」をしながら、本は何回読んだらよいとお考えですか。

Ａ：（１）社会学者の小室直樹先生は、「いい本は最低 10 回は読みなさい」とおっしゃっています。

（２）あるとき、参考資料とした福田歓一著「政治学史」（東京大学出版会）が絶版になっていることがわかった。それを知って、小室は夫人に「あーそうか、あと十冊買っておけばよかった。」「先生 10 冊買ってどうするのですか」「くだらない本を 10 冊読むよりも、大事な本を 10 冊買って 100 回読んだ方が勉強になるんだよ。」「いい本は、最低 10 回読みなさい。凡庸なのはたった 1 回しか読まないからだ。」

（３）先生は、１回目赤いマーカーで線を引く。2 回目は黄色いマーカーで線を引く。3 回目は青いマーカーで線を引く。それで線を引くところがなくなったら新しい本を買う。これを繰り返していたそうです。

＊村上篤直著「評伝 小室直樹―現実はやがて私に追いつくであろう（下）」ミネルヴァ書房 2018 年 9 月 20 日刊 546 ～ 547 ページから引用。

Ｑ：学習塾・予備校・私立学校の幹部の先生方にお伝えしたいことは何ですか。

Ａ：（１）「論述式入試に向けた思考力・表現力の育成」の前提条件は「作者・筆者との時空を超えた本格的読書」の習慣を身に着けることだと考えます。

（２）その有効な一つの方法が、この「マージナリア」、Reading with a pencil、本の余白にどんどん書き込みをしながら同じ本を何回も読むことです。

（３）「マージナリア」は「新聞」にも応用できます。新聞を読み、これぞという記事に出会ったら切り抜き、コピーをするか、ノート（スクラップブック）に「ノリ」で貼り付け、意見や感想をどんどん書き込み、ジャンル別に整理。繰り返し読み返すことです。

＊是非、この夏休み中に「読書教育」や「新聞を活用した教育（NIE）」に励み、10 月の読書週間や新聞週間、11 月の NIE 月間をお迎えください。

Ｑ：最後に一言どうぞ。

Ａ：今月も先生方がお読みになれば必ずお役に立つ本をご紹介いたします。

（１）① 1 冊目は、一橋ビジネススクール客員教授の名和高司著「パーパス経営 30 年先の視点から現在を捉える」東洋経済新報社 2021 年 5 月 6 日刊です。世界は「資本主義」から「志本主義」へ。学習塾はじめ、すべての民間教育で最も大切な、「高い志」に基づく経営の具体的展開方法が、わかりやすく示されています。

②同じく一橋大学名誉教授の寺西重郎著「日本型資本主義 その精神の源」中公新書、中央公論新社 2018 年 8 月 25 日刊や、

③同じく一橋大学名誉教授の野中郁次郎、竹中弘高著「ワイズカンパニー 知識創造から知識実践への新しいモデル」東洋経済新報社 2020 年 9 月 10 日刊の 2 冊と全く同じ、「高い志」の教科書です。以上、①～③の 3 冊をこの夏の読み物となさることをおすすめします。

（２）2 冊目は、サルマン・ラシュディ著「真夜中の子供たち（上）（下）」岩波文庫、岩波書店 2020 年 5 月 15 日刊です。インド型変種ウイルスの蔓延で塗炭の苦しみの中にあるインドの現代史

の理解としてうってつけです。戦後日本の独立と復興は、東京裁判でのパール判事はじめインドの真正面からの支援なしでは語れません。そのインドが新型コロナウイルスの蔓延で国家存亡の危機的状況にあります。今こそ「インド理解」の上で、インドの復興支援が求められます。日本の中に息づく＜インド＞を知るには、東京大学名誉教授で東方学院の前田専學先生のご著書「インド思想入門　ヴェーダとウパニシャッド」春秋社 2016 年 8 月 18 日刊が最適です。また、インド独立の父「偉大な魂(マハトマ)」の思想と活動原理の精髄を書き記したガンディー著「獄中からの手紙」岩波文庫、岩波書店 2010 年 7 月 10 日刊を「真夜中の子供たち」とともにお読みください。

(3)先月号でもご紹介しましたが、NHK 大河ドラマ「晴天を衝け」の主人公、渋沢栄一の 2 つの伝記、渋沢栄一自伝「雨夜譚(あまよがたり)」と幸田露伴作「渋沢栄一伝」どちらも岩波文庫や渋沢栄一著「論語とそろばん」の 3 冊は「マージナリア」、つまり、Reading with a pencil、書き込みながら読み「作者・著者との対話」をするのにぴったりの本です。また、日本経済新聞朝刊に連載中の伊集院静作「ミチクサ先生」(夏目漱石の一代記)を読みながら「吾輩は猫である」「三四郎」「それから」「心」「虞美人草」などを読むのにも、「マージナリア」はとても役立つと考えます。是非、ご挑戦ください。

日本経済新聞の読者の先生は、この際、夏目漱石のみならず正岡子規、高浜虚子、寺田寅彦の作品を「マージナリア」をしながらどんどん読み進めてください。社会学者の小室直樹先生の著作も「マージナリア」には最適です。是非、ご挑戦を‼

(4)4 冊目は、フェルナンド・アラムブル著、木村裕美訳「祖国(上下)」河出書房新社 2021 年 4 月 24 日刊、ドイツ在住の作者によるスペイン現代文学の金字塔ともいえる作品。ETA・バスク独立運動に揺れる家族がテーマ。スペイン現代文学を紹介し続けるマドリッド在住の木村裕美さんの日本語訳をすべて読んでいるが、相変わらず素晴らしいの一言。同じ翻訳家の翻訳作品をすべて読むのも読書の一つ。私は、木村裕美さんの翻訳でスペインやスペイン語圏の現代文学の素晴らしさを知りました。有難いことです。

(5)5 冊目は、山本芳久著「トマス・アクィナス―理性と神秘」岩波新書、岩波書店 2017 年 12 月 20 日刊です。不幸な世界も中世哲学の最高峰トマス・アクィナスの「神学大全」を読めば肯定的に生きられる。山本先生の最新著「世界は善に満ちている、トマス・アクィナス哲学講義」新潮選書、新潮社 2021 年 1 月 27 日刊とともに是非お読みください。怒り、憎しみ、悲しみなどネガティブな感情の整え方をトマス・アクィナスの「肯定の哲学」から本の余白にたくさん書き込みをしながら学びましょう。

(6)6 冊目は、立田慶裕著「読書教育の方法、学校図書館の活用に向けて」學文社 2015 年 1 月 31 日刊です。Reading　Education、読書教育ほど子どもたちの潜在能力の開花に必要なものはありません。ではどのように行ったらよいか。本書は参考になります。

2021 年 6 月 30 日林明夫記